

自覺に於ける直觀と反省 (承前)

西田幾多郎

四十三

我々に最も直接なる具體的經驗の真相は絶對自由の意志である、種々なる作用の人格的統一である、種々なる經驗體系の内面的結合である。それぞれの立場の上に立つ經驗體系を一つの圓に喩へて見ると此等の圓の中心を結合する線は絶對自由の意志でなければならぬ、即ちその統一は認識對象として考へ得る靜的統一ではなくして、それ自身に獨立なる無限の動的統一でなければならぬ、之を繰返すことのできない無限の發展といふのも、既に之を對象化したものである。我々の直接經驗即ち眞實在を右の如きものとして考へて見ると此の如き絶對意志の否定的反省の方面即ち無限大の半徑を有する圓の立場の如きものが純粹思惟の立場であつて、此立場から翻つて全經驗を見たものが所謂實在界である、即ち時間、空間、因果といふ如き

構成的範疇に依つて組織せられた實在界であく。此の如き世界が我々の認識の最初の對象である、意志の世界から知識の世界に移る第一歩である、兩世界の境界である。而して此の如き純なる反省の立場からして異質的なる經驗を同質的原理に依つて統一しようとするのが自然科学の見方である、マックス・プランクが物理學の目的を、擬人主義からの解放となすのも之に依るのである。種々なる作用の統一なる人格的經驗に就て、種々なる作用の差別を否定して、何の作用の背後にも横たはる共通の反省の立場から、すべてを統一しようとするのが物理學の見方である。我々の所謂物質界とは此の如き見方に依つて成れる實在の一方面である。絶對意志の否定的反省のアブリオリの上に立つ世界として、カリライやロックの第一次的性質といふのは此の如き見方の産物に過ぎない、すべての人に共通なる客觀的世界と考へられるのであるが、一方より見れば否定的反省作用といふ如き或一つの特殊なるアブリオリの上に立つものとして、却つて主觀的と考へることもできる、現代哲學に於て物理的世界を主觀的と考へるのは此點に着眼せられたのである。

絶對意志の部分的意志として肯定の裏面に否定を含む、我々の經驗體系は、その一々が右に云つた如く絶對意志の否定的反省の方面に接觸し、所謂物質界に屬すると

考へられると共に、その一々が絶対意志の肯定の方面に連続し、一大人格の統一の中にあると云ふことができる。例へば我々が色の経験を反省した時、それが思惟の對象として思惟の統一の世界に屬し、物質界の一現象とも考へられると共に、色の経験はそれ自身のアブリオリの上に立ち、思惟のアブリオリに對しては何處までも非合理的としてそれ自身の獨立を維持するのである。即ち我々の経験は一方に於て物質界に屬すると共に、その一々が純性質的としてそれ自身の獨立を要求する、我々の経験内に於て思惟と同等のオリジナリテイを要求するのである、名目論者の考の様に、思惟は却つて主觀的なる一作用と見做すこともできるのである。それで自由意志の形に於て絶対意志の中に成立する我々の直接経験は何も一方に於て絶対意志の否定的反省の方面に連らなると共に、一方に於て絶対意志の肯定的發展の方面に連らなつて居ると考へねばならぬ、前者の方面から見たものが物質界であるとすれば、後者の方面から見たものが心理學者の所謂精神現象である、ナトルプの再構成的方法 *rekonstruktive Methode* の立場といふものも之を意味するものであらう。今、此等の立場の關係を、我々の内省に訴へて考へて見ると、我々の直接の経験即ち藝術的直觀といふ如きものは認識を超越した具體的意志の立場である、之を絶対意志の否定の

方面から見た時、此經驗自身の獨立の立場が否定せられ、統一の中心は思惟の立場に移り、原經驗に對しては、外から之を統一すると考へられる。併し眞の絶對意志は否定即肯定、肯定即否定でなければならぬ、無限なる否定の裏面に無限なる肯定の可能がなければならぬ、それで否定に對して肯定の立場を顧みた時、云はば否定の否定、反省の反省の立場に立つた時、そこに我々の所謂精神界がある、我々が此立場に立つて見る時、我々は自己の精神現象を反省するといふのである。勿論此の如き意味に於ける否定の否定は眞の否定の否定ではない、此の如き意味の肯定は眞の肯定ではなくして相對的肯定である。眞の否定の否定即ち眞の肯定は反省即發展否定、即肯定であつて、如何なる意味にても反省することのできぬものでなければならぬ。相對的肯定の立場といふのは、否定即肯定たる絶對意志の立場に立つて、或一つの經驗體系を見た場合である、全作用の絶對的統一の立場から翻つて部分的作用を見た場合である。この立場を *aktuelle* の立場から見たものである、*potenzielle* は一層大なる立場との結合を示すものである。見るとか、聽くとか、考へるとか、いふ立場に對して、我々は見ようと思ふとか、聽かうと思ふとか、考へようと思ふとか、いふ如き即ち私は意志するといふ立場を考へることができ、即ち自由意志の立場といふものを考へること

ができる、此立場からして種々の作用其物を對象として見ることが出来る。此立場から見れば思惟の立場も反省の立場ではなくして、或一つの肯定の立場となる、従つて自然科学的世界は唯一の世界ではなくして、唯一つの世界となる、此立場に於ては思惟其物を否定し之を反省することが出来るのである。普通の用方に於ても反省といふのは此の如き意味であつて、向に云つた自然科学的反省といふ如きことは却つて外界を知るといふ様に考へられるのである。之に反し自由意志の立場は絶対に之を反省することはできぬ、何となればそれは他を反省する立場なるが故である。普通に人格的立場として認識せられるものも嚴密に考へれば或一つのアプリオリの統一に依つて成る、相對的肯定の立場に過ぎない、従つて眞の我に屬するのではなく、矢張り外界の一部に屬するのである。眞に絶対意志の肯定に屬する世界は認識の世界に對して神秘の世界でなければならぬ、此處に藝術の世界があり、宗教の世界があるのである。嘗て二十四の終に於て反省せられた作用は既に作用其物ではないと云つたか、所謂知識の立場に立つては、我々は作用其物を反省することはできない、反省せられたものは既に對象であつて作用其物ではないのは云ふまでもない。併し作用の統一たる絶対意志の立場からは作用其物を對象として反省することが

できる、即ち作用を體驗することが、できるのである。意志の立場からは反省的思惟其物を反省することが、できる、即ち思惟其物を體驗することが、できるのである。絶對的意志の立場といふのは外進即内進の立場である、經驗體系の外進と内進とは此立場に於ては同一であつて、却つて兩方向は此中に於て成立するのである、恰も衝突と反動とは同一の力であると同様である。此立場からは作用其物を對象とすることが、できるのである。

絶對自由の意志立場からは右に云つた如く作用を對象として之を意識することが、できる。知覺とか思惟とかいふ如き認識主觀の立場に於てはその對象界は一つのアプリオリの上に立つ動かすことのできない客觀的對象であり、主觀其物たる作用は反省することが、できぬと考へられるのは勿論である。併し作用の統一たる意志主觀に於ては、その對象は單に可能の世界である、種々なる作用即ちアプリオリ其物を選択の對象として反省することが、できるのである。要するに知識の立場は經驗體系の固定せられた抽象的立場であつて意志はその具體的全體の立場である、知識の立場から意志の立場を對象として見ることは、できぬが意志の立場からは知識の立場を對象とすることが、できるのである。斯くの如き絶對意志の立場がナトル

プの所謂再構成の立場であつて、此立場から見たいものが我々の精神現象の世界である。我々の精神現象といふのは種々の作用の結合である。此結合點がリップスの所謂意識我 *Bewusstsein* とも云ふべきものであらう、意識現象は必ず一つの「我」の意識として成立するのである。種々の圓錐曲線を極限概念に依つて一の連續として包容することができるかも知れぬが、翻つて考へれば此等の曲線は皆それぞれのアプリオリの上に立つて、一々が獨立の作用と考へることがができる。すべてが二次方程式の曲線として統一せられることに依つて、獨立の作用としての性質が消え去るのではない。作用の統一たる絶對自由の意志の立場から見れば、作用其物が却つても直接なる對象である。我々が一つの作用の中にある間は、作用自身を對象とすることはできぬであらうが、絶對意志の立場に立つて作用自身を超越することに依つて作用其物を對象とすることができるのである。對象と云へばすべて同一の様に考へられるかも知れぬが、一つは知識の對象であり、一つは自由意志の對象である。精神現象は後者の對象として、後者の立場に依つて生ずる實在界である。自由の意志なきものは精神現象を理解することはできぬ、意志は精神現象の依つて以て成立するアプリオリである。若し實在の階級といふ如きものを考へるならば、プロチヌス

以來、ディオニシユースやスコトウス・エリユギナなどが神はすべての範疇を超越すると云つた様に何等の意味に於ても反省のできない絶対自由の意志と云ふ如きものが最も直接な、最も具體的な第一次的眞實在であつて、此の如き絶対意志の對象として意志的關係の世界、即ち作用其物の純粹活動の世界ができる。余は之を象徴 *Symbol* の世界と名けて置かうと思ふ。此世界に於ては空間も時間も因果もない、象徴派の詩人の歌ふ如く、視るもの聽くもの盡く一種の象徴である。ザイス女神のヴェールをあければ數學も宗教である。今日のカント學徒では知識はアブリオリに於て成立すると考へて居るが、アブリオリ以前の世界、即ち絶対意志の對象界では、すべての對象は一々無限の精神的活動でなければならぬ、此立場からはすべて個々のものが無限なる精神作用の象徴である。余は此の如き象徴の世界はアレフを最小數とする無限數の世界と考へることができると思ふ。無限數といふのは嘗て云つた如く、それ自身に獨立なる自覺、即ち自動的なるアブリオリに依つて成立つのである。唯一つの秩序から成立つ我々の知識の世界は有限數の世界であつて、その極限に於て己自身を超越して無限數の世界、即ち意志の對象界に入るのである。カントの云つた如き時間空間、因果の有數限的關係に依つて眞實在を統一しようとするれば、忽ちアンチノミ

に陥るの外はない、唯無限數的なる自由意志に依つて我々は眞實在に接することができるのである、物自體の世界は意志の世界、無限數の世界である。以上述べた如き譯であるから、我々の知識の世界、有限數の世界以前に時間空間因果の關係を超越した無限數の世界、象徴的對象の世界がある。昔グノシス派 Gnostiker が根本的の神と此世界との間に種々の “Sohnschaften” とか “Aeonen” とかいふ人格的實在を考へたのは、強ち古代哲學者の空想として排斥し去ることはできぬ。バジライデスの未在の神 *ὁ οὐκ ὄν θεός* とか、バレンチヌスの太始的深所 *Πύθος* とはいふべき絶對的意志から現れ出つる最始の對象は人格的實在でなければならぬ、否、我々の眞の自己は今も尙象徴派の詩人が現實の根柢に見る神秘の世界に住みつゝあるのである。

右に云つた如く、絶對意志の立場から見た最始の對象界は藝術の世界、宗教の世界である。此立場からしては所謂認識對象の世界は一つのアプリオリとして、即ち一つの作用として對象視することができ、斯くして作用自身の反省せられたものが所謂意識現象である。それで意識現象とは絶對意志の否定的と反省いふべき純粹思惟の統一に依つて成る自然科學的世界と絶對意志の立場から見た直接の對象界たる象徴的世界との接觸點であると云つてよい。嘗て云つた如く絶對意志の否定の

方面ともいふべき純粹思惟の立場から經驗全體を統一して見た時、時間、空間、因果の範疇に依つて成る所謂實在界ができる、所謂精神界と物體界とは此實在界を境界として相接觸するのである。此の如き純粹思惟の立場から何處までもすべての經驗内容を統一して行くことに依つて、物體界ができる。併し絕對意志に於ては元來一々の作用がエラン・ゲイタールとして思惟に對して同等の獨立性を要求するのである。それで物體界の方へ歩を進める代りに翻つて此實在界を絕對意志の肯定の立場から見たものが歴史の世界である。歴史の世界といふのは絕對意志の直接の對象たる象徴の世界の立場から所謂實在界を見たものである、即ち所謂實在界を意志對象の世界との關係に於て見たものである。自然科學的見方を意志の相對的否定の方面とすれば、歴史的見方はその相對的肯定の方面ともいふことができる、此等に對し藝術の立場及び宗教の立場は肯定即否定なる具體的立場である。歴史の世界は所謂實在界の一種の見方として尙認識界に屬するが藝術の世界、宗教の世界は全然知識の範疇を超越して居る、即ち作用其物である。藝術的見方は普通に主觀的とか、空想的とか考へられるのであるか、右の如き意味に於て却つて眞の客觀的見方であると云ふことができる。藝術に於ては一般の中に特殊を含み、個物が直に全體である、

一つのアプリオリの上に立つ自然科学的見方に對して、アプリオリの結合とも見らるべき歴史の世界は具體的根元として客觀的實在と考へられるが、藝術の立場、宗教の立場は肯定即否定、一般即特殊として、一層具體的なる立場と云はねばならぬ。歴史の立場も自然科学的立場と同じく絶對意志の一の作用たる純粹思惟の立場に屬して居る、前者は此立場から全經驗の内容を統一しようとするのであり、後者は一層具體的なる立場から之を翻つて見るのである、併し全然一つの作用を超越して全人格の立場に立つた時、それが藝術の立場、宗教の立場となる。此立場はアプリオリのアプリオリであつて其一般性は抽象的概念の一般性ではなくして、創造的一般性である。嘗て推論式の形式に依つて精神と物體との關係を論じたが單なる一般性を現す大語は絶對意志の否定の立場から見た物體界であつて、一つの限定性を現す小語はその肯定の方面を現す心理的自我であり、判断は全體の立場から見た意志現象の世界、歴史の世界を現すと考へることができ、而して推論式其物は具體的全體として如何なる意味に於ても對象とはならぬ絶對意志であると云ふことができるであらう。

右に云つた如く我々の意識現象と物體現象とは互に獨立する實在界ではない。

意識現象とは或一つのアプリオリの上に立つ對象界を翻つてアプリオリの統一たる絶對意志の立場から見たものである。純粹思惟のアプリオリの上に於ては數理の世界が現れ、此立場から全經驗を統一することに依つて自然科學的世界が出来る。自然科學的世界は亦そのアプリオリの性質に依つて物理の世界、化學の世界、生物の世界といふ様に階級的に分つことができる。さて純粹思惟のアプリオリを反省することに依つて、所謂規範意識とか、純粹自我の統一作用とかいふ如きものができる、即ちリッゲルト所謂超越心理學の對象の如きものである。思惟の立場から經驗を統一することに依つて成立する自然科學的對象界を反省することに依つて我々の所謂意識現象の世界ができる。例へば色といふ經驗界の據つて立つ所のアプリオリを反省したものが視覺作用である。自然科學的に云へば眼といふ感官ができて、色の經驗を生ずると考へねばならぬのであらうが直接經驗の立場より見れば、眼といふ如きよりも、色といふ經驗其物が一層根本的でなければならぬ。先づ色といふ直經驗が與へられなければ、眼といふ物體が特殊なる意義を有つことはできないのである。アプリオリのアプリオリたる絶對意志の立場から、色のアプリオリといふべきものが反省せられ、絶對意志の否定的方面を現す同時存在の平面に於て、他の經

驗内容との關係に於て見られた時はじめて眼といふ感官が考へられるのである。絶對意志の立場より見れば、眼といふ如きものよりも、色の經驗のアブリオリの方が根本的である。此處には因果の關係を入れるべき餘地はない、無より有を生するのである。此の如きアブリオリを反省したものが心理的作用であつて、我々の個人的自己とは此の如き作用の束に過ぎない。種々なるアブリオリの上に立つ經驗の體系の或一つの結合、即ち種々アブリオリの或一つの統一を、絶對意志の上から反省して見たものが我々の意識的自我である。而して此の如き作用の一束即ち作用の或統一を絶對意志の否定的統一の對象界に映じて見られたるものが我々の身體である、或一種の經驗だけ此對象界に映じて見られたるものが感官である如く、アブリオリの有限なる統一が此對象界に映されたものが身體である。有機體とは絶對意志の否定的統一の對象界を絶對意志の直接の對象界との關係に於て見たものである。此故に生機體は物體と精神との結合點とならねばならぬ恰も解析幾何學に於て、プラスとマイナスとの二義を有する一點が一方に於て曲線の内部に屬すると考へられると共に、一方に於てはその外部に屬すると考へられる如くに一つのアブリオリが絶對意志の肯定面に屬するとしては精神作用となり、その否定面に屬するとして

は有機體となるのである。自然界の目的論的見方といふのは物體界をその具體的根元から見た見方である、従つて單なる否定的統一の上に立つ機械論的見方とは全然異なつた立場である。機械論的説明を進めて目的論的問題を解決しようとするのは、古き解析家が無限に分つことに依つて極限點に達しようとしたのと同様の誤である。物體現象の目的はその進み行く先に於て生ずるのではなく、始に於て與へられてあるのである、乙があるには甲が先だねばならぬといふ様に、進行はその手段に過ぎない。或一つのアプリオリのの上に立つ對象界の具體的根元が此對象界の目的である。此意味に於て、ロッエの云つた如く、有機體は自然の目的となり、精神は有機體の目的となると云ふことができる。精神と身體との結合といふことも右の如く考へることに依つて理解することができる。絶對意志の否定的統一の對象界たる所謂物體現象が絶對意志の直接の對象たる作用との關係に於て見られることに依つて目的論的となり、その統一點が右に云つた如くプラスとマイナスとの二義を有し、一方には生命の中心と考へらると共に又精神と身體との結合點と考へられるのである。絶對意志は此點を通して肯定から否定に、否定から肯定に行くのである。嘗て云つた如く有意的行爲に依つて精神と物體とが結合せられると考へられるの

は之に依るのである。若し此點を尙一步進めて、フイドルの所謂藝術的活動に於ての如く我々の行動が一々表現運動となつた時、我々は單なる否定の世界を否定して絶對意志其物に歸することができ、是に於て物體界は物體界としては實在性を失ひ、一々が象徴として見られるのである。

以上述べたことを繰返して云へば或一つの特殊なる經驗内容を、これは何々であるとして絶對的否定の立場に立つて見た時、此經驗は否定的統一の對象界に入り來つて、時間、空間、因果の範疇に依つて組織せられた所謂實在界の事實となる。此の如き事實界を境界線としてリッケルトなどの云ふ如く、一般化的統一と個性化的統一との兩方向に進むことができる。前者は自然科學となり、後者は歴史となる。自然科學的見方といふのは絶對的否定の立場即ち純粹思惟のアプリオリから事實界を統一する見方であり、歴史的見方は翻つて之を絶對意志の直接對象界との關係に於て見たものである。歴史は宇宙精神の傳記である。之に反し全然絶對的否定の立場を超越して人格的統一即ち絶對意志其物の具體的立場に還る時、我々は全然事實の世界を超越して藝術的見方の世界に入るのである。右の如く考へて見ると、心理學者の所謂意識界といふのは歴史の世界と自然科學的世界との中間に位するものと

云つてよい。更に詳しく云へば歴史は事實界に於ける藝術的見方であつて、此見方と自然科学的見方との接觸點を前者の方から見たものが、精神現象で後者の方から見られたものが生物現象である。精神と身體との平行といふのは要するに一種の論理的要請に過ぎない。心理學者の所謂精神現象といふのは身體の基礎に於て見られたる直接經驗の内容であり、反對に身體とは精神に對應して考へられた物體である。要するに、或一つの立場の否定即ち部分的意志の否定が一方に於て身體の基となり、一方に於て精神の基となるのである。それで所謂心理現象なるものに就て生理的心理學に於ての様に、その生理的説明を徹底して行けば遂に物理現象に還元せられねばならぬ、之に反し多く心理學者の主張する如く反對に直接經驗其物を忠實に記述しようとすれば、勢、傳記の如きものとならねばならぬ。ヴァントは精神現象はすべて創造的綜合 *schöpferische Synthese* の因果律に従ふと云ふが、若し此考を嚴密に徹底すれば、ベルグソンの純粹持續の如きものとならねばならぬ、即ち心理學的法則といふ如きものは立てることはできなくなるのである。所謂心理學者は歴史的現象と自然科学的現象との中間に、身體的統一に對應する意識我といふ如き作用の一束を定め、此統一に依つて成立する對象界を意識界と名づけて居るのである。此の

如き意識界は意志の活動を否定の方面に寫したものであるだけそれだけ物體的と考へることができ、従つて一般的法則といふ如きものを考へることができ生理的現象と相對應することができるのである。

以上述べた如く、心身の現象とは絶對意志が部分的意志即ち直接經驗の或一體系を否定するとに依つて成立し、その否定的統一の對象界に映じて見たものが身體であつて、之を元状態との關係に於て見たものが精神現象である。ベルグソンが同時存在の方面が物體界であり、純粹持續の方面が純精神であり、その接觸點に於て我々の身體と意識とが成立つといふのも同意義である。余が嘗て推論式の大前提の方面が物體現象であり、小前提の方面が精神現象であり、大語が物體界を表し小語が精神を表すといつたのも同一の考へである。心身の關係を右の如く考へるならば、意識と無意識との關係は如何に考へべきであらうか。意識と無意識との關係は、上來述べ來つた如き立場を取るならば、嘗て云つた如く或一つの意識内容とその背後に横たはる具體的根元、即ち限定されたものとその基たる己自身を限定するものとの關係と考へねばならぬと思ふ。此意味に於て或一つの限定せられた線とか圖形とかに對して、無限の次元の如きものがその背後の無意識と考へるとができるのである。

る。無意識の作用があるといふことは自然科学的に存在するといふのではない、即ち自然科学的原因として働くといふのではない。自然科学的原因として對象化せられた無意識は、生活力などと同じく、我々の客觀的對象界に屬したもので、一種の物力と異なる所はない。此の如き意味に於て無意識的精神などといふものがあると云ふのは矛盾である。此の如き意味の無意識とは生物の生理作用と意識我の意識作用との間に説明のため設けられた一種の假定的統一に過ぎない。此の如き無意識を意識の原因として考へられることは、物體を意識の原因として考へるのと同じく本末顛倒である。眞に意識の根元たる無意識は、*Ursprung*の如きものでなければならぬ。此の如き無意識があるといふのは自然科学的意義に於て存在するといふことではなく、プラトンの理念の世界の如き意味に於て存在するのである、余の所謂絶對意志の對象として存在するのである、世界創造以前の神の思想である、此の如き無意識は意識を離れて存立するや否やと云ふことに對しては、如何なる意味に於ても全然限定なき理念、即ち全然意識と關係のない無意識といふ如きものはあり得ないのである。併し限定せられた或個人的意識といふ如きものを離れて理念の如きものが存在し得ると考へることができ、否、人間全

體、生物全體といふものがなかつたとしても理念其物は存立すると考へることができらるであらう。

四十四

精神現象と物體現象との區別及び相互の關係を以上に述べた如く考へることは嘗て論じた如く、我々の常識及び自然科学的考方とは相容れないと考へられるであらう。我々の常識では身體が精神の原因と考へられ、眼に依つて光覺が生じ、耳に依つて音覺が生ずると考へられる。自然科学の考方に於ても之と同様である。併し自然科学的考方といふのは既に云つた如く絶對意志の否定の立場に立つて全經驗を統一する見方である。一度此立場に立つて考へて見れば、所謂時間、空間、因果の關係の如きものが動かすことのできない實在の秩序となり、物體現象がすべての現象の根柢と考へられ、精神現象は宇宙進化の或時期に於て、生物の神經系統に伴ふ附屬物と考へるの外はなからう。併し自然科学的立場に於ては右の如き考が動かすことのできない眞理であると考へねばなるぬかも知らぬが、斯く考へる我は自然界には屬せない、自然科学的世界はカントの云つた如く純我の統一に依つて成立するの

である。自然科学的世界の根本概念たる時間、空間、因果の形式を以て全實在を統一しようとするれば、忽ち矛盾に陥らねばなぬ。自然科学的世界は唯一つの世界であつて、唯一の世界ではなからぬ。平面の世界を超越して立體の世界に到る如く、我々は自然科学的世界を超越して自由意志の世界に入ることが出来る。この世界は所謂汝は爲さねばならぬ、故は、汝は爲し能ふ自由意志の世界である、夢の如き空想も動かすことのできない事實たる世界である、婦を見て心を動かすものは既に姦淫と見らるべき世界である。物理的の時に現象學的の時とも云ふべき價値の時がなければならぬ。内面的に統一せる藝術的動作を自然科学的に考へて機械的に説明することもできるであらうか、その極めて直接なる内面的意味は自然科学的に説明することはできぬ、而して自然科学的説明なるものも、その根柢に於て何等か此種の意味を許さなければ説明は成立つことができぬのである。我々の精神は一方に於て身體に依存し、物質界に従屬すると考へられると共に、一方に於ては直に宇宙精神の人格的歴史に接續して居る。神の國への途は何時でも我々の背面に開いて居る。アウグスチヌスが考へた様に我々は神の國と惡魔の國とに屬して居る、此兩國は現在の我に於て相接して居るのである。此意味に於て眞の世界は星雲を以て始まるといふ代

りに、世界は人格の歴史を以て始まると云ふこともできる。余の世界は余の生涯と共に始まり、我々人間の世界即ち人間の對象界は人間の歴史を以て始まると云つてよい。純粹思惟の對象界たる物體界よりも人格的歴史の世界が具體的實在である。精神現象は普通に考へられる如く時々刻々に生滅するものではない、ベルグソンの云ふ如く記憶は己自身を保存するのである、我々が推理に依つて外に物體界が現存すると考へねばならぬ如く、内に歴史的實在が現存すると考へねばならぬのである。普通には前者を唯一の實在と考へて居るが、若し前者を實在といふならば、後者も同じく、否それ以上に直接な具體的な實在と云はねばならぬ。正しく云へば、人間の行爲といふ如き一つの實在はその結果と動機との和がその全體である様に、すべて具體的實在は物體プラス精神でなければならぬ。歴史的實在に於ては現象は機械的因果の法則に従つて生起するのではなくして、手段と目的との目的論的因果に従つて生起するのである。固より我々の小なる人格に於ては全經驗を目的論的に見ることは不可能であらうが、人格の大なれば大なる程、一層大なる範圍に於て目的論的に見ることができるのである。スピノーザの知的愛といふ如き神的性格に至れば、すべてが必然的と見られると共に、すべてが目的論的と見られることもできる

のである。此の如き人に取つてはすべてが、永久の今である、自然科學的に、時が推移すると考へられても、精神的にも同時存在の一平面を廻轉して居るに過ぎない。一直線の中にあるものは一瞬の過去にも返ることのできない無限の推移と考へることも、二次元の立場から見れば自由に過去に返ることができると考へることができ。物理的時とは實在の最も抽象的なる見方の形式に過ぎない。純粹思惟の統一といふ如き立場に立つて見れば、物理的時の順序といふ如きものが動かすことのできないもので、身體が精神の原因と考へられねばならぬであらうか、ベルグソンの云ふ如く、身體は精神の貯蓄所ではない、却つてその切斷面に過ぎないのである。

身體なくして精神現象はない、精神現象は必ず身體に伴はねばならぬといふのは、普通に考へられる如く、物體といふものが精神現象と沒交渉にその以前に存在し、精神現象は附加物として其上に生ずるといふ意味ではない。精神現象と物體現象との區別は一つの實在の見方の相違であつて、要するに精神と身體との平行といふことは思惟の要請に過ぎない。絶對自由の意志ともいふべき我々の直接經驗は到る所に反省の可能を含んの居る、即ち何の經驗も之を同時存在の平面に映じて見ることができ、換言すれば物質化することができるのである。眼がなければ視覺的經

驗がないといふことは、眼といふ物質から視覺的經驗が生ずるといふ意味ではなくして、絶對意志の否定的統一の對象界たる所謂物體界に於て、眼といふ射影を有せざる經驗の體系はないといふことである。此故に嚴密なる意味に於ての物體界といふものには、精神現象の結び付き様がない、物體現象が目的論的統一に依つて有機體と考へられ、有機的統一の中心即ち知覺神經と運動神經との結合點が精神の座と考へられるのである。我々の感官といふ如きものが一方に於て純物質として單に客觀的と考へられると共に、一方に於ては精神現象の基礎として主觀的と考へられるのも、右の理由に依つて解することができる。要するに、神經作用といふのは絶對意志の否定から肯定に、肯定から否定に移る一階段に過ぎない。否定から肯定に移る順序を云へば、物理的見方から生理的見方に、生理的見方から心理的見方に、心理的見方から歴史的見方に至ると考へることができ、肯定から否定に至る順序は之を逆にしたものと考へることができ、神經作用とは前者の最初の階段に過ぎない。此等の現象界のすべてを結合するものは、時、空を超越した「永久の今」ともいふべき我々の意志其物である。此意志の中心が何時でも現在であつて、「此」といふ語を以て表はされるのである。現在の意志は種々なる世界の結合點となるのである。「目的の王國」

の市民として、それぞれの立場に於て、絶對自由の影を宿せる經驗體系は、それぞれの立場に於て現在を有し、それぞれの立場に於て種々なる世界の結合點となる。斯くして我々の個人的なる心身の結合が成立つのである。但し此等の背後に横たはる絶對意志は全體を統一して一體系となすが故に、宗教家の考へる如く、世界は神の人格的顯現となり、所謂物體界はその身體であつて、歴史はその傳記であるといふことができる。眞理の世界は神の思想とも云ふべきであらう。

若し思惟と經驗との對立とか、精神と身體との關係とかいふものが、これまで論じた如きものとするならば、實在は唯一つの直接經驗といふ如きものであつて、合理的と非合理的とか、必然的と偶然的とかいふ如き對立は要するに經驗統一のアプリアの相違に過ぎないと考へることができる。若し純粹思惟のアプリアを以て、種々なる感覺作用のアプリアに依つて成立する全經驗を統一しようとするならば、前者に對して後者が非合理的と考へられ、偶然的と考へられるのは當然である。併し嚴密に云へば、論理に導いて數理が非合理的となり、算術に導いて解析が非合理的となる。之に反し、マイノングの對象論に於ての如く、我々の種々の感覺に就てそれぞれの先驗學が成立つと考へることができ、例へば色に就て色の幾何學 *Farbengeo-*

metrie といふ如きものが成立つと考へることが出来る (Meinong, Bemerkungen über die Farbenkörper und das Mischungsgesetz. Z. f. Ps. 33)。一つの立場から非合理的とか、偶然的とか考へられるものも、他の立場からは合理的で、必然的であると云ひ得るのであらう。つまり合理的とか非合理的とかいふことは立場の相違といふこととなる。而して此等の種々なるアプリオリを統一するものは絶対自由の意志のアプリオリである。此立場に立つては、思惟と經驗と、精神界と物體界と、意味の世界と事實の世界とを結合することが出来る。斯く考へて見ると、或個人が此時、此場所に於て、或眞理を考へるといふとも絶対自由の意志のアプリオリに依ると考へることが出来る。既に思惟の對象界に移された自然科學的存在に過ぎない心理的自我は最早一般妥當的眞理と結合するとはできぬ。併し我々の自我は之を純粹思惟の統一の對象界に映して心理的自我と考へられると共に、その一々が絶対意志の面影をやどせる自由なる人格である。種々なる作用の統一と見做すべき自由なる人格は種々なるアプリオリの結合點であり、種々なる世界の切點である。或時、或場所に限定せられた個人的自我が一般妥當的眞理を考へるといふのは、絶対意志が此切點を通じて自由に自然科學的存在の世界から他の對象界に移り行くのである、同時存在の平面的世界から

意志對象の象徴界たる立體の世界に移り行くことである。斯くして我々の精神現象は單なる自然科學的存在ではなくして一般的意味を寓せる象徴となるのである。

右に論じた如く、種々のアプリアオリに依つて種々の世界が成立つことができ、我々は絶對意志の統一を通じて自由にその一より他に移り行くことができる。或個人が或事を考へるといふのは一層高次のな世界に移り行くことである、平面の世界から立體の世界に移り行くことである。元來自然科學的世界を超越した對象界に屬せる意味とか價値とかいふ如きものは純論理派の人々の考へる如く自然科學的存在たる個人的作用を超越したものと考へられねばならぬ、何人が何時、何處で考へても同一のものでなければならぬ。或人に意識せられるといふことは内容其物に何物も加へないのである。ヘーゲルが、*„Encyklopädie“* に於て *„Das Subjekt, das Einzelne als Einzelnes(im singulären Urteil)ist ein Allgemeines. In dieser Beziehung ist es über seine Singularität erhaben.“* の *„Phänomenologie“* の始に於て *„Was ist das Dasein?“* を論じて、その *„ein unmittelbares“* あらずして *„ein vermitteltes“* であると云つて居る様に、我々が此時、此場所といふことを意識した時、我々の意識は既に此時、此場所を超越して居るのである。此時、此場所といふことは一般的意識の對象であつて、誰でも考へねばならぬ思惟の對象であるの

である。「此」として限定せられたものは、「此」を意識することはできぬ、「此」といふことを意識するには我々の主観は先驗的主観にまで上らねばならぬ。「此」といふことは他人の心理現象の外にあるのみならず、「此」として指定せられたる心理現象其物の中にもないのである。個人的自己が如何にして一般妥當の眞理を考へ得るか、の疑問は右の如くにして解することができる。併し尙一層深く考へて、ヘラクライトスの永久の流にも比すべき純粹持續の流を離れることのできない自己は如何にして過去を顧ることができるか、先驗的主観の立場に上るといふこと自身が既に純粹持續の流の中に起れる事實ではないかといふ疑問を出すこともできるであらう。勿論先驗的立場に立つといふことは自然科学的時を超越するとしても、ベルグソンの云ふ如き純粹持續の眞の時を超越することはできぬと考へ得るでもあらう。我々の道徳的自由の行爲は自然科学的因果を超越するとしても、更に一層深き我々の人格的歴史上の事實である、人格的歴史の上に印した過去の痕跡は如何にしても之を消すことはできぬと考へることもできる。併し嘗て論じた様にベルグソンの純粹持續といふ如きものは既に一つのアプリオリの上に立つて居るのである、もはや對象の世界に屬して居るのである。一つのアプリオリから自由に他のアプリオリに移り

行くことのできる絶對自由の意志の立場に於ては、如何なる事實も何等の痕跡をも留めない。所謂水月の道場に座して空華の萬行を行するもの、絶對に能働的な意志は何等の意味に於ても受働的とはならぬ。無限數は有限數に對して何處までも無限なる如くである。若し絶對意志が何等かの意味に於て、行爲の爲に己自身を限定すると云はゞ、それは既に對象化せられた意志である、眞に能働的な絶對意志といふことはできないのである。我々の自我はその奥底に於て此の如き絶對意志に接續して居る。我々の性格として意識するものは empirischer Charakterであつて、intelligibler Charakterではない、後の性格に於ては、我々は何のアプリオリを取るかは自由である。判断の誤謬といふとも右の如く考へることに依つて可能であると思ふ。對象化せられた客觀界に於ては誤謬といふものの起り得べき筈はない。此故に自然科學的見方に於ては誤謬の判断も必然的因果の法則に依つて起ると考へられる。誤謬とは自由なる純主觀的作用の上に起るものである、種々なるアプリオリの統一作用の上に於て起るのである、異なる立場の混淆より起るのである、或一つの立場に對して他の立場を混入し來るより生ずるのである。元來誤謬とか罪惡とかいふことは一方に於て物の不完全なることを表すと共に、一方に於てその具體的なことを示

すものである。唯、豊富にして深き實在のみ誤謬と罪惡とに陥ることができぬ。聖
シラン Cynus の言の如く *Unde ardet, inde lucet* と云ふべしである。(完結)